

CLMET コーパスを用いた状態変化動詞に後続する前置詞句に関する一考察

藤原隆史

1. 導入

英語の動詞には、状態変化動詞と呼ばれるものがあり (e.g. 影山 1996)、そのような動詞には、「動詞そのものが何らかの状態変化を表す意味を本来的にもっている」(影山 1996: 215) という性質がある。影山 (1996: 214) は、例えば「こわす、つぶす、切る」といった意味を表す動詞として、*break (to bits), crack, shatter, smash, split, tear, chip, cut, saw, snip, decompose* を挙げている。これらの動詞は結果構文において用いられ、後続する結果句には *in/into* 結果句が生起することが知られているが、*in* 結果句と *into* 結果句の意味と使用実態は時代ごとに変遷している。本研究では、通時的な *in/into* 結果句の出現頻度の変化について、*The Corpus of Late Modern English Texts (CLMET)* コーパスを用いた分析を行い、1700 年代前半から 1900 年代前半における状態変化動詞に後続する *in/into* 結果句の使用実態を明らかにする。

2. 先行研究

「こわす、つぶす、切る」という意味を表す状態変化動詞が用いられた用例として、並木 (2013: 152) は、*John broke the vase {into/in} pieces., John cut the steak {into/in} pieces.* という例を挙げている。これらの用例から明らかなように、状態変化動詞に後続する結果句として *into* 結果句と *in* 結果句の両方が許容される。これらの違いについて並木 (2013: 153) は、「*into* 結果句は状態変化の結果状態へと向かう過程と結果状態に概念的際立ちを与えるのに対し、*in* 結果句は変化後の結果状態のみに概念的際立ちを与える」と述べている。例えば、*John broke the mug into pieces.* においては、*John hit or beat the mug and then it turned into pieces.* という意味は含意できても、*John left the mug in pieces.* という意味は含意できないが、一方で、*John broke the mug in pieces.* には *John left the mug in pieces.* という意味が含意されると並木 (2013) は説明している。

また、江口 (2022: 253) によれば、*into* 結果句と *in* 結果句の出現には語用論的知識が関わっているという。例えば、*John broke the egg {[?]in/into} the bowl.* において *in* 結果句の容認度が落ちるのは、この文には「卵を割る」と「割った卵をボウルに入れる」という 2 つの行為が関係しているからであるという。そして、前者の意味は *broke* によるものである一方で、後者の意味は動詞ではなく語用論的情報によってもたらされるものであると江口 (2022) は説明している。このような場合、変化の過程を含意しない *in* 結果句は不適格となり、変化の過程を含意する *into* 結果句の使用が要請されることになる。

さらに、*in/into* 結果句の通時的な分析として、唐澤・小塚・堀田 (2025) は、古い時代の前置詞 *in* は後ろに与格名詞が続く場合は静的な位置関係を、対格名詞が続く場合は動的な移動の方向 (変化) を表していたと説明している。さらに、中英語期以降に格の水平化が起こったために、この使い分けができなくなったことで、後者の意味を表すために *into* が使用されるようになったと唐澤ら (2025) は説明している。すなわち、元々 *in* が担っていた意味用法の一部が、*into* によって担われる変化が進行していることを示している。この変化を検証するために、藤原 (2025) では、*Corpus of Historical American English (COHA)* を用いて、1820 年から 2019 年において *break, cut, tear, shatter, split* に後続する *in/into* 結果句の出現頻度を調べ、40 年ごとに時代を区分した上で独立性の検定を行った。結果として、*break, cut, tear* において、時代の変遷に伴って出現頻度に有意な差が見られた。いずれも 19 世紀には *in* 結果句が優勢であったのに対し、20 世紀後半以降 *into* 結果句が急増し、1980 年代以降には *into* 結果句の使用が *in* 結果句を大きく上回る傾向が示された。以上から、19 世紀までは *in* 結果句が優勢であったが、20 世紀以降 *into* 結果句の使用が拡大し、静的位置関係を表す *in* と、過程と結果状態を含意する *into* との意味機能の分化が進行している可能性が示唆された。ただし、藤原 (2025) では *COHA* の時代における *in/into* 結果句の頻度しか調べられておらず、より古い時代における *in/into* 結果句の出現頻度の変遷が明らかにされていないという課題が残っている。

以上のことから、本研究においては、藤原 (2025) が行った *COHA* を用いた *in/into* 結果句の頻度調査を補うために、*COHA* よりも古い時代のテキストである *CLMET* コーパスを用いて調査を行う。それにより、1700 年代前半から 1900 年代前半における状態変化動詞に後続する *in/into* 結果句の出現頻度の変遷を明らかにすることを目的とする。

3. 分析方法

本研究では、*CLMET* を対象として、状態変化動詞に後続する *in/into* 結果句を抽出し、その通時的変化を分

析する。分析対象とする状態変化動詞は、藤原（2025）で有意差のあった *break, cut, tear* であり、その後位置に現れる *pieces, parts, slices* を伴う *in/into* 結果句を収集した。コーパスからの対象の抽出には Python を用い、抽出した対象を全て確認したうえでノイズを除去した。時代区分については、CLMET のデータ全体を 40 年ごとの区分（一部は 20 年単位）に再分割し、それぞれの時期における *in/into* 結果句の頻度を集計した。得られたデータは、藤原（2025）の分析と同様に χ^2 二乗検定による独立性の検定を用いて、時代区分と前置詞句の使用頻度との関係を検証した。さらに、調整済み残差を算出することで各時代における *in/into* 結果句の使用傾向を明らかにし、効果量として Cramér's V を求めて差異の大きさを定量的に評価した。

4. 結果と考察

検定の結果、 $\chi^2(5, N=261)=20.44, p=0.00103$ となり、時代区分と *in/into* 結果句の選好には統計的に有意な関連が確認された。効果量 Cramér's V は 0.280 であり、小～中程度の効果が認められた。以下の表は、年代別の *in/into* 結果句の頻度と調整済み残差、さらに、これらから考えられる傾向をまとめたものである。

表 年代別 *in/into* 結果句の頻度と調整残差

年代	in 出現数	into 出現数	in 調整残差	into 調整残差	傾向
1710-1749	69	20	2.5	-2.50	in 優勢
1750-1789	53	16	1.94	-1.94	in 優勢傾向
1790-1829	13	6	0.10	-0.10	差なし
1830-1869	25	24	-2.72	2.72	into 優勢
1870-1909	12	14	-2.44	2.44	into 優勢
1910-1929	4	5	-1.50	1.50	差なし

18～19 世紀にかけて、*in/into* 結果句の使用が有意に変化したことが確認された。18 世紀前半～後半では *in* 結果句が優勢であり、古英語以来の対格用法の *in* の名残が見られる。一方、19 世紀中葉以降には *into* 結果句が増加し、*in* を上回るようになり、*in* が静的関係を、*into* が動的・結果的關係を担うという機能分化が進んだ。20 世紀初頭でも *into* 優勢の傾向は維持され、COHA の結果と連続的である。したがって、CLMET は *in* 優勢から *into* 優勢への「過渡期」であると考えられることができる。

さらに、CLMET 内では文脈やジャンルによる前置詞選択の揺れが観察された。例えば、同一著者内でも *in/into* の併存があり、「論文 (treatise)」では *into* 結果句が多く、料理書や物語では *in* 結果句も見られる。このことから、18～19 世紀は文体・ジャンルに応じて両形式が併用された「過渡期」であったと結論づけられる。

5. 結論

CLMET を用いた分析から、*in* 結果句から *into* 結果句優勢への転換は 18 世紀～19 世紀中葉に段階的に進んだことが確認された。CLMET 期は、*in/into* の分布が揺れ、ジャンル差も顕著に見られる「過渡期」である。この変化は、格の水平化後に「静的 *in*」と「動き・変化を伴う *into*」という機能対立が再構築されたことを反映する。COHA の 19～20 世紀の結果と接続すると、*into* 結果句は 20 世紀後半には完全に定着しており、*in/into* 結果句の変遷は文法化の一過程として理解できる。

参考文献

- 井上永幸・赤野一郎（編）. 2013. 『ウィズダム英和辞典第 3 版』東京：三省堂。
 江口巧. 2022. 「変化結果を表す *in/into* 前置詞句の交替について」『英文学研究支部統合号』14, 251-259.
 影山太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点—』東京：くろしお出版。
 唐澤一友・小塚良孝・堀田隆一. 2025. 『英語語源ハンドブック』東京：研究社。
 並木翔太郎. 2013. 「項構造基盤結果構文における *in* 結果句の生起について」『JELS』30, 152-158.
 藤原隆史. 2025. 「COHA を用いた状態変化を表す *in/into* 前置詞句の出現頻度に関する通時的研究」『英文学研究支部統合号』17, 123-138.
 Davies, Mark. 2008-. Corpus of Historical American English (COHA), <https://www.english-corpora.org/coha/>. (Retrieved on July 31, 2024).
 De Smet, H., Flach, S., Diller, H.-J., & Tyrkkö, J. 2015. The Corpus of Late Modern English Texts, version 3.1. Oxford Text Archive Core Collection, <https://lids.phon.ox.ac.uk/lids/xmlui/handle/20.500.14106/2574?show=full>.